

埼玉県熊谷市。日本一暑い街としても知られており、町の中には、荒川が流れており、いくつもの水路がある水と関わりの深い街である。蛇口をひねれば、あたり前のように水が出てきて、私たちは、生活用水として、飲んだり、洗ったりと利用している。

ぼくが、初めて見た水の風景は、日本ではない。飛行機の中から見る、どこまでも茶色の大きな川だ。それは、中国大陸全土につながっている、中国の生命線だ。日本の生活用水とは、違っているのは明らかだ。

その一つに、生水では、飲めないということである。飲料水は、購入するか、沸かし湯といって、一度煮沸して冷ましてから飲む。そのため、ぼくは、日本に帰国した時に、先生から、のどがかわいたら、水道で水を飲んでくれるように言われても、どうしても、蛇口から水を飲むことができなかった。どうしてみんなは、直接水が飲めるのだろうか、不思議で仕方がなかった。先生からも、心配されたが、ぼくにとっては、生水を飲んでいるみんなのほうが心配だった。日本の水のすばらしさに、まだこの時は、気が付いていなかった。

そしてもう一つは、お風呂事情である。中国では、湯ぶねにお湯を張って入浴するという生活習慣がない。お湯を張ると、水が茶色く変色しているからである。白い洗濯物は、何度か洗っているうちに茶色く染まってしまう。洗濯しているのに、茶色くなっていくというのが、中国に限らず海外の水事情の定番である。その中で、あたり前のように暮らしてきた、ぼくには、日本で湯ぶねにお湯を張っても、濁らないお風呂や、何度洗っても変色しないTシャツは、とても驚いた。

日本は、水源が豊かな国としても知られており、中国のお店でも、日本のミネラルウォーターは、とても高く売られていた。そんな、水源の豊かな日本でも、水の猛威に襲われた忘れられない出来事があった。中国でも見たことのない、茶色の、濁流が何十メートルもの高さで、街に覆い被さる風景は、水の恐ろしさを映し出していた。そして、生きるために大切な水は、あつという間に私たちの生活を変えてしまったのである。そんな恐ろしい水も、原発の事故では、火消しのために、大量の放水をし、事態を沈静化させたのも、水源の豊かな日本の技でもあったのは、事実である。

人間と水の関係は、時に災害をもたらす事もあるが、人間は、水の中で誕生した生命を受け継いでいる生物の一つである。人間の体は、ほとんど水でできているといっても、過言ではない。体内から、水がなくなってしまうえば、それは、死をも意味することとなる。つまり、私たちは、水なしでは、生きてはいけないということなのだ。人間は、水によって生かされている。日本は、水資源が豊かであるがゆえに、「蛇口をひねると水がでる。」のがあたり前となっているのが、水道普及率九十七・三パーセントという高い数字からもよくわかる。しかし、暮らしの水のほとんどを水道水に依存している日本にも、水がなくなつた時の生活は、どのようなになるだろうか考える時が近い将来くるかもしれない。事実地球温暖化により、降水量は、年々減少傾向にあり、毎年のように、各地で水不足もおこっている。一九六四年のオリンピックの際には、水の使いすぎで、一時、水が出にくくなるということもあったと聞いている。二〇二〇年のオリンピックでは、世界中の人々が、日本の蛇口をひねる。そして、限りなく透明な日本の水に気が付くことだろう。だからこそ、生活をしている私たちが、水のあり方や使い方を見直していかなければならないのである。そして、ぼく自身も、あの時の、蛇口をひねれば直接水が飲めるという、衝撃的な気持ちを忘れずに、水と共存していこうと思っている。